

# Arthuriana Japonica: Newsletter No. 37

November 2024

国際アーサー王学会日本支部会報  
Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

## 目次

I. 2023年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	2
研究発表要旨	3
講演要旨	4
II. 電子化について	4
III. 学会メーリングリストについて	4
IV. 会計からのお願い	4
V. 学会サイトについて	5
VI. 第38回年次大会について	5
VII. 研究発表・シンポジウム企画募集	5
VIII. 会員名簿に関するお願い	5
IX. 文献情報	5
英文学	5
独文学	7
北欧文学	7
仏文学	7
中世ラテン・イタリア文学・その他	9

## I. 2023年度年次大会報告

日本支部の2023年度年次大会は、下記の通り開催されました。ご参加いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

[日時] 2023年12月9日（土）12:30より  
[場所] 慶應義塾大学 日吉キャンパス（独立館D403）/ Zoomとのハイブリッド開催  
[大会費] 1,000円（学生会員 無料）  
[懇親会費] 6,000円（学生会員 3,000円）

## 年次大会プログラム

\*開場（12:00）

開会の言葉	支部長 小路 邦子
司会：伊藤 尽	
研究発表 1	
J.R.R. トールキンのガウェイン像—“ofermod”と “chivalry”に着目して	岡本広毅（立命館大学）
司会：横山 由広	
研究発表 2	
イゾルデの父はなぜ「アフリカ生まれのグルムー ン」なのか？	一條麻美子（東京大学）
司会：松原文	
研究発表 3	
『トリスタン』の作者性を巡る近年の議論につい て	渡邊徳明（日本大学）

司会：不破 有理

講演

Eugène Vinaver と ‘-9’ の年

高宮 利行（慶應義塾大学）

\*会員研究動向・情報交換フォーラム（16:30～）

\*支部総会（17:10～）

今回も会員のみ参加可といたしましたが、多くの方にご出席いただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

（文責：松原文）

## 総会議事録

### \* 報告事項

#### (1) 2023年度の活動について

対面・Zoomとのハイブリッド形式で実施されました。

#### (2) 書誌活動報告

日本支部における業績は、2023年度も充実したものとなりました。毎年夏に業績報告をお願いしていますが、今後も一層のご協力をお願いいたします。また、非会員の業績も掲載可能ですので、積極的に情報をお寄せください。

#### (3) 学会サイト「アーサー王伝説解説」について

複数の記事の作成が進行中で今後掲載予定です。

#### (4) 本部の書誌データベース

書誌データベース (BIAS) のオンライン化が現在進められています。

### \* 審議事項

#### (1) 2023年度決算報告 (2022年12月1日～2023年11月30日)

会計担当幹事（当時）の田中ちよ子先生より、会計収支決算が報告され、承認されました。

### 収入

項目	収入額
年会費(74件@3000円+2000円)	224,000
寄付金	0
入会金	0
賛助会員費	10,000
小計 1	234,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	0
懇親会費	0
小計 2	0
2022年度からの繰越金	842,875
普通預金口座利子	4
総計	1,076,879

### 支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	237,388
ホームページ関連費用	9,094
事務用品代・雑費	8,972
通信費	17,662
小計 1	273,116
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	10,000
懇親会費用	0
小計 2	10,000
2024年度への繰越金	793,763
総計	1,076,879

#### (2) 2024年度予算案提出 (2023年12月1日～2024年11月30日)

続いて2024年度予算案が提出され、会員の承認を受けました。

### 収入

項目	収入額
年会費(会員数80名@3,000円)	240,000
寄付金	0
入会金(1件)	3,000
賛助会員費	5,000
小計	248,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費(30名@1,000円)	30,000
懇親会費(25名@6,000円)	150,000
小計	180,000
2023年度からの繰越金	793,763
普通預金口座利子	4
総計	1,221,767

## 支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	250,000
ホームページ関連費用	10,000
事務用品代・雑費	5,000
通信費	15,000
小計	280,000
<b>【支部大会経費】</b>	
学生アルバイト代	21,000
懇親会費用(25名@6,000円)	150,000
小計	171,000
<b>2025年度への繰越金</b>	770,767
<b>総計</b>	<b>1,221,767</b>

(文責：岡本広毅)

### (3) 新入会者承認について

以下1件の入会が承認された。

森野聰子氏（推薦人：小路邦子・辺見葉子）

(文責：松原文・岡本広毅)

## 2023年度年次大会研究発表要旨

### 1. J.R.R. トールキンのガウェイン像—“ofermod”と“chivalry”に着目して

岡本広毅

J.R.R. トールキンにとって円卓の騎士ガウェインは特別な存在である。彼の最初の目覚ましい研究業績は、リーズ大学時代に同僚 E.V. Gordonとともに編纂した校訂本『ガウェイン卿と緑の騎士』(1925年)であり、本作のファンタジー創作への影響はこれまで指摘されている。本発表では、古英語叙事詩『モールドンの戦い』(10世紀)に関するトールキンの論考『ベオルフトヘルムの息子ベオルフトノスの帰還』(1953年、以後『帰還』)を起点に、その中で言及・称賛されるガウェイン像について掘り下げる。『帰還』の議論で要となる古英語の語彙 “ofermod”(勇気・誇り／驕

り) の分析、それと奇妙に置き換える “chivalry”(騎士道) の用法はトールキンのガウェイン像あるいは『ガウェイン卿と緑の騎士』解釈と無関係ではない。また、本発表では『帰還』と同年に行われた『ガウェイン卿と緑の騎士の騎士』に関する講演や現代英語訳も踏まえ、古英詩にみられる武勇や忠誠の美德がガウェイン解釈にいかされていていることを指摘した。最後に、未完のアーサー王物語『アーサー王の転落』に登場するガウェインに関してもさらなる検討が必要であることを示唆した。

### 2. イゾルデの父はなぜ「アフリカ生まれのグルムーン」なのか？

一條麻美子

トリスタン物語において、イゾルデの父であるアイルランド王はさして重要な役割を果たすことがない。しかるにドイツの詩人ゴットフリートは彼に「豪胆王グルムーン」という名を与え、アフリカの王族でありながら進取の気性をもって故国を出奔し、アイルランドを征服して王となったという来歴を付け加えている。そこにはどのような意図があったのだろうか。この「アフリカ生まれのアイルランド王」という記述から、ゴットフリートの聴衆/読者が連想したのは、まず第一に『ブリタニア列王史』第11巻第8章に登場する「ヒベルニア（アイルランド）にいるアフリカ人たちの王ゴルムンドウス」であったと考えられる。ゴルムンドウスはアーサー王亡き後の混乱期を代表する人物であること、またゴットフリートが『ブリタニア列王史』にはないグルムーンとローマの朝貢関係に触れていることから、ゴットフリートはトリスタンを、かつてローマからの貢ぎの要求を拒否したアーサー王の後継者として位置づけようとしていたと推測される。つまりゴットフリートはトリスタン物語を「史書」と交錯させることにより、フィクションとしてではなく「史実」に近い歴史物語として創作するという意思をもっていたと考えられるのである。

### 3. 『トリスタン』の作者性を巡る近年の議論について

渡邊徳明

『トリスタン』は1210年頃にゴットフリート・フォン・シュトラースブルクによって書かれ、その独自の恋愛至上主義に基づく文学世界は「近代的」とも評される。このいわゆる「不倫(Ehebruch=婚姻を破る)の愛」は、その後のヨーロッパの恋愛文学に大きな影響を与えた。しかしおよそ八百年前の物語から読み取れる「内面性」は近代文学のそれと同じように、作者個人のパーソナリティや思想を強く反映していると考えるべきなのか、を本発表では問題とした。その際に、注目した論点は「閉鎖性」と「開放性」である。

まず、物語内に描かれる恋人同士の愛が、そもそも純粋に社会とは切り離された独自の「閉鎖的」世界であるのか、あるいはむしろ常に宮廷的な価値観や秩序を踏まえた、社会に対し「開放的」でフラットなものであるのか、というレベルの考察を行った。

更に、創作としての閉じた作品と読むか、伝承の中で民衆に開かれた物語と読むか、によっても、位置づけは変わることを指摘した。その手がかりとして、ほぼ同時代に成立した英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』を引き合いに出した。近年では、伝統的なジャンル分けの違いに強くは捉われず、この両物語も受容者が「開いたテクスト」として共有したものと扱われる。そして作者の演出が感情や記憶のレベルで受容者にどのように訴え、どのような「感情の文法・技法」が共有されてたかが、研究では注目されていると、発表者は強調した。

#### 講演

Autumn 1966, Vinaver & Gaines

高宮利行

Eugene Vinaverは、1966年の秋学期からWisconsin大学Madison校でフランス語を教え始めた。英文科博士課程のBarry Gainesは研究助手に採用されて、Malory3巻本の再版の最終校正に携わった。その過

程でR. T. Davies版やD. S. Brewer版などの学生用テクストが、Winchester写本に準拠と言しながら Vinaver版を無許可で引用していることが明るみに出た。

こうした校閲の成果や互にユダヤ人だったことから、二人の交流は長く続いた。Vinaverが没する前年、彼を訪ねた私に優れたマロリー学者としてコンコーダンスを編集した加藤知友巳教授と Gainesの名前を挙げた。後者は1990年にマロリー刊本書誌を出版したが実際に面白く読めた。彼が収集したマロリーコレクションを譲ると言われた時、私が選んだのは1578年出版の第5版、世界で10部ほどしか現存していない一書だった。

Gaines夫妻は東京に遊びにきて、私のコレクションを楽しんだ。私は数年後にアルバカーキーに飛んで、彼の大学で講演し、彼のコレクションを堪能した。

#### II. 電子化について

国際アーサー王学会日本支部では、会員の皆様への連絡手段に、メーリングリスト等の電子媒体を活用しております。ただし、ご希望の方へは郵送での連絡を続けております。まだご回答いただいている場合、事務局 (office@arthuriana.jp) までご連絡くださいますようお願いいたします。

#### III. 学会メーリングリストについて

現在、学会員用メーリングリストは間接投稿とさせていただいております。投稿を希望する場合、まずは事務局まで文案をお知らせください。役員で確認後、配信いたします。

また、希望の方には日本支部よりメールアドレスを新規発行いたします。この件も事務局までご連絡ください。

#### IV. 会計からのお願い

2025年度分会費（ならびに2024年度以前の未納分）の納入をお願い申し上げます。会費は別送の「払込取扱票」にてお支払いいただくか、下記口座に直接お振込みください。

#### 〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部  
ゆうちょ銀行口座番号：00250-6-41865

#### 〈ゆうちょ銀行以外の金融機関からの振込み〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部  
金融機関：ゆうちょ銀行（コード：9900）  
店名：○二九（ゼロニキュウ）店（店番：029）  
預金種目：当座  
口座番号：0041865

年会費は3,000円です。また新入会員の入会時には入会金3,000円を頂いております。新規入会希望者をご推挙いただく際には、希望者にその旨お伝えくださいますようお願いいたします。

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を隨時募集しております。ご寄付いただけます場合、「寄付〇口」とお書き添えの上、同封の払込票をご利用のうえ年会費とともに振込みいただか、直接口座にお振込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。

【お知らせ】2019年度以降、当学会で進めている電子化に伴い、年会費納入もゆうちょ銀行口座への振込みのみとなります。年次大会会場での現金納入はご遠慮いただけますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。また、会費納入が5年連続して確認できなかった場合、退会扱いとさせていただきますのでご留意ください。

（会計：小川佳章）

#### V. 学会サイトについて

学会公式サイトでは、支部大会や国際大会のお知らせを掲載しております。

「アーサー王伝説解説」の項目では、これまで多くの会員のご協力で、さまざまな作品やモチーフについて記事が蓄積されてまいりました。そして、より多くの方々にアーサー王関連の情報を提供していくために、新たに「事典編」を開設する予定となっております。つきましては、「事典編」の記事執筆にご協力いただける会員を随时募集中

です。

また、学会として確かな研究に基づいた情報を、今後さらにどのように発信していくとよいか、アイデアがありましたらお寄せください。

学会公式X（@inter\_arthur\_jp）でも、写本や映画、新刊など幅広い情報を随時発信中ですので、ぜひご覧ください。

学会公式サイト <http://arthuriana.jp/index.php>

学会公式X [https://x.com/inter\\_arthur\\_jp](https://x.com/inter_arthur_jp)

（Web委員長：田中一嘉）

#### VI. 第38回年次大会について

第38回年次大会は対面で開催されます。

（詳細は大会資料をご覧ください。）

日時：2024年12月14日（土）13:00 開会（開場  
12:30）

会場：成城大学 721教室（7号館2階）

大会費：1,000円（学生会員無料）

懇親会費：6,000円（学生会員3,000円）

#### VII. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では隨時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら庶務までお寄せください。シンポジウムは同年7月末、研究発表は同年8月末を締切とし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

#### VIII. 会員名簿に関するお願い

名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに庶務までお知らせください。なお会員に配布される名簿に関しては、一部の事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を未掲載にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

#### IX. 文献情報

ここには、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

英文学（書誌担当：杉山ゆき）

＜研究（単行本）＞

大沼由布・徳永聰子（編集）『旅するナラティヴ：西洋中世をめぐる移動の諸相』（知泉書館）2022年、304p.

日本ケルト学会：森野聰子・梁川英俊（編集）『ケルト学の現在』（三元社）2024年、544p.

徳永聰子（編集）『神・自然・人間の時間：古代・中近世のときを見つめて』（慶應義塾大学出版会）2024年、240p.

松田隆美（編集）『本景—書物文化がつくりだす連想の風景』KeMCo叢書1（慶應義塾ミュージアム・コモンズ）2023年3月、253p.

＜研究（雑誌・研究紀要等）＞

上石実加子「中世ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』における頭韻詩の伝統とその乖離」『駒澤大学文学部研究紀要』（駒澤大学文学部）81号、2024年3月、pp.13-25.

Noriko Inoue, « The “Extra-Long” Dip in the Poems of the *Gawain Poet*», *Chaucer Review*, 58卷2号、2023年4月、pp. 232-258.

大沼由布「Gigantesの運命—古代中世ヨーロッパの巨人伝承の変遷—」『「巨人」の場（トポス）—古代オリエント・ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人表象の変遷』、勝又悦子編（同志社大学一神教学際研究センター）2023年3月、pp.59-79.

岡本広毅「中世ブリテン建国史と巨人族討伐—『ブルート』年代記とロマンスにおける歴史的記憶—」『「巨人」の場（トポス）—古代オリエント・ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人表象の変遷』、勝又悦子編（同志社大学一神教学際研究センター）、2023年3月、pp. 139-164.

岡本広毅「英雄精神と〈騎士道〉——トールキンのベオルフトノスとガウェイン」『ユリイカ：詩と批評』（青土社）55卷14号、2023年11月、pp.191-204.

北沢格「〈漁夫王〉のカード：『荒地』執筆過程についての考察」『英語英米文学』（中央大学英米文学会）64卷、2024年2月、pp. 25-47.

北村一真「マーク・トウェイン『アーサー王宫廷のヤンキー』の邦訳版の誤訳から見る初期近代英語の難しさと正確な訳出のための方法論」『杏林大学外国語学部紀要』（杏林大学外国語学部）36号、2024年3月、pp. 75-87.

斎藤伸治「ジョーゼフ・キャンベルの「聖杯の神話」について」『Artes Liberales』（岩手大学人文社会学部）113号、2023年11月、pp. 59-69.

TANI, Akinobu, « Malory's Phraseology: A Preliminary Attempt of Analyzing E-texts Based on Field (2017) », *Poetica : An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, 97/98号、2023年3月、pp. 39-54.

趙泰昊「外部世界への旅と「曖昧な他者」との邂逅—Bevis of Hamptonにおけるアイデンティティの揺らぎ—」『明治大学教養論集』（明治大学教養論集刊行会）573号、2023年12月、pp.161-185.

TOKUNAGA, Satoko, « Le Morte Darthur in Fifteenth-Century European Book History », *Poetica : An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, 97/98号、2023年3月、pp. 29-38.

Nii, Tatsuya, « Materializing Latinate Prayers: John Lydgate's Aureate and Paraliturgical Poems in a London Merchant's Booklet', *Chaucer Review*, 58卷1号、2023年1月、pp. 120-146.

不破有理「マシュー・アーノルドにおける〈ケルト的なるもの〉の形成とその残影—『ケルト文学の研究について』（一八六七年）再評価の試み—」『ケルト学の現在』（三元社）2024年、pp.289-337.

辺見葉子「トールキンと〈ブリティッシュ〉／〈ケルティック〉」『ユリイカ：詩と批評』（青土社）55卷14号、2023年11月、pp. 166-175.

松本侑子「生きる喜び、読む楽しみ(第77回)五～六世紀イギリスの伝説的英雄アーサー王の物語『アーサー王ロマンス』『アーサー王物語』『女性のひろば』（日本共産党中央委員会）543号、2024年5月、pp.68-71.

森野聰子「翻訳 トリスタン物語」『ケルティック・フォーラム』26号、2023年10月、pp. 23-28.

＜研究書の翻訳＞

メアリー・ウェルズリー（田野崎アンドレア嵐・和爾桃子訳）『中世の写本の隠れた作り手たち：ヘンリー八世から女世捨て人まで』（白水社）2023年12月、360p.

＜翻訳＞

スザンナ イヴァニッチ（金沢百枝・岩井木綿子訳）『CATHOLICA カトリック表象大全』（東京書籍）2023年2月、256p.

キャスリーン・ウォーカー＝ミークル（堀口容子訳）『中世ネコのくらし 装飾写本でたどる』（美術出版社）2024年、96p.

ローズマリ・サトクリフ（山本史郎訳）『アーサー王最後の戦い（普及版）』（原書房）2023年11月、272p.

ローズマリ・サトクリフ（山本史郎訳）『アーサー王と円卓の騎士（普及版）』（原書房）2023年11月、432p.

ローズマリ・サトクリフ（山本史郎訳）『アーサー王と聖杯の物語（普及版）』（原書房）2023年11月、272p.

マイケル・プレストウィッチ（大槻敦子訳）『中世の騎士の日常生活：訓練、装備、戦術から騎士道文化までの実践非公式マニュアル』（原書房）2024年4月、288p.

#### ＜書評＞

HASEGAWA, Chiharu 「書評：Peter R. Beaven. *Building English Vocabulary with Etymology: Introduction*, Andover (Cheshire Press, 2018)」 *Studies in Medieval English Language and Literature*, 38号、2023年7月、pp. 31-38.

MUKAI, Tsuyoshi, 「書評：K. S. Whetter, *The Manuscript and Meaning of Malory's Morte Darthur : Rubrication, Commemoration, Memorialization* (Cambridge: D. S. Brewer, 2017)」 *Studies in Medieval English Language and Literature*, 36号、2021年9月、pp. 53-58.

#### ＜その他＞

##### \*コメント・監修

高木眞佐子 Web 雑誌 Wezzy(ウェジー) <<https://wezz-y.com/>>に掲載。（コメント・監修）  
北村紗衣「「ガウェインの結婚」を歴史の授業で使わないで！～中世の英文学と女性がもっとも望むこと」『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』[2023.12.30] [2024年3月31日サイト閉鎖のため、現在閲覧不可]

##### \*コメント出演

田中ちよ子 NHK BS『ダークサイドミステリー「みんな大好き！魔法のすべて 不思議な力はどこから来たのか？」』2024年8月6日

##### \*最終講義

不破有理 慶應義塾大学経済学部「アーサー王伝説に魅せられて～研究と教育と～」2023年2月8日（講演動画）  
<https://keio.app.box.com/s/hzm6123zn97qipozn0doat1hnku9w12j>

#### 独文・北欧文学（書誌担当：嶋崎啓）

##### ＜研究（雑誌・研究紀要等）＞

有信真美菜「祝宴の料理を描／書きたいのか書きたくないのか？ 中世ドイツ語圏の人々の飲食物に対する複雑な思い」『西洋中世研究』15号、pp. 143-151.

一條麻美子「指環と指輪——欲と黄金の物語の系譜」『ユリイカ：詩と批評』（青土社）55巻14号、2023年11月、pp. 62-73.

伊藤尽「北欧神話から『指輪物語』へ：J・R・R・トールキンの物語創造」『美術の窓』（生活の友社）43巻7号、2024年7月、pp. 64-69.  
小澤実「ヴィンランド・サガの歴史学：ヴァイキングの知られざる顔」『日経サイエンス』（日経サイエンス社）2023年3月号、pp. 49-55.

HAMANO, Akihiro, « Waka und Minnesang. Ein Plädoyer für den Vergleich von japanischer und deutschsprachiger Liebeslyrik des Mittelalters », *Lyrik interdisziplinär - Texte und Studien zu Ehren von Franz-Josef Holznagel*, Schwabe Verlag, 2024年5月, pp. 35-54.

山本潤「〈怒り zorn〉と〈敵意 haz〉：中世叙事文学に見る感情の表象するもの」『西洋中世研究』（西洋中世学会）15号、2023年、pp. 16-32.

渡邊徳明「中世以来の愛にまつわる〈不気味なもの〉の伝統一人間の〈物化〉に対するフロイト的な恐怖—」『リュンコイス Lynkeus』（日本大学文理学部独文研究室桜門ドイツ文学会）56号、2023年、pp. 1-22.

#### ＜翻訳＞

（谷口幸男訳・松本涼監修）『新版 アイスランドサガ』（新潮社）2024年6月、1128p.

#### 仏文文学（書誌担当：竹田千穂）

##### ＜研究（単行本）＞

小栗栖等, *Édition électronique du « Roland » de Cambridge* (Projet Rollant 2), Geste Francor 2, 2023, 762p.

後藤里菜『沈黙の中世史—感情史から見るヨーロ

ツパ』（筑摩書房）2024年7月、320p.  
杉崎泰一郎『〈聖性〉から読み解く西欧中世：聖人・聖遺物・聖域』（創元社）2024年5月、336p.  
中村美幸『百年戦争下のパリでひとびとはどう生きたか：『パリー市民の日記』（1405-49）から読み解く』（ミネルヴァ書房）2024年5月、344p.  
MUTO, Natsuki, *Le merveilleux dans les romans d'antiquité*, thèse de doctorat, Sorbonne Université, 2023, 391p.  
渡邊浩司『幻想的存在の東西—古代から現代まで』（中央大学出版部）2024年、556p.  
渡邊浩司（監修）かみゆ歴史編集部（編著）『アーサー王物語解剖図鑑』（エクスナレッジ）2024年、144p.

<研究（編著書内の分担執筆）>

渡邊浩司「モルガーヌからマドワーヌへ—『クラリスとラリス』における妖精像」渡邊浩司（編著）『幻想的存在の東西—古代から現代まで』（中央大学出版部）2024年、pp. 239-275.

<研究（雑誌・研究紀要等）>

有田豊「8本の詩にみる中世ヴァルド派の教理：「悔悛の奨励」を中心に」『立命館言語文化研究』（立命館大学国際言語文化研究所）36巻1号、2024年7月、pp. 115-130.

有田豊「中世期のヴァルド派における聖書理解」『フランス語フランス文学研究』（日本フランス語フランス文学会）125巻(0)、2024年、pp. 21-36.

岡田真知夫 ブログサイト ISLE D'avalon に掲載した記事。

<流布版集成<ランスロ=グラアル>の「定本」> [2023.10.14]

<いくつかの語のカタカナ表記> [2023.10.15]  
- 言及しているのは \*laid, Balaain - Balaan (Balin - Balan), gauuain, graal, Galaad.

< tomb(e) と womb(e) > [2023.10.16]  
- 「同じ一つの vaissiel から出て同じ一つの vaissiel に入る」(MerlinSR 234, 26-28) ベイリンとベイラン。マロリー『アーサー王の死』(キャクストン版) の誤植。

<demorer en la place — abide in the field> [2023.10.20]

- フロワサールが用いている「死ぬ」意を含む表現とマロリーに拾えるその敷き写しと思われる表現。

< demorer / morer / morir en la painne >  
[2023.11.7]

- 誤解されている morer (demorer — 現フ. demeurer - の「基体語」) を用いた表現について。フロワサールの『メリヤドール』と年代記。

< enfes - enfant, abes - abé > [2023.11.27]  
- enfés と表記する誤り。

<小栗栖等著『古フランス語入門』校正メモ 1 ~12> [2024.3.16~25]- メモ形式で記した corrigenda。

嶋崎陽一「ゴーヴアンとペリアス：『アーサー王の死』と『メルラン続編』を比較する」『龍谷紀要』（龍谷大学龍谷紀要編集会）45号(2)、2024年3月、pp.89-101.

高名康文「パストゥレルにおける人間性と動物性」『ヨーロッパ文化研究』（成城大学大学院文学研究科ヨーロッパ文化専攻）43号、2024年3月、pp. 113-128.

宮下拓也「中世イタリアのフランス語」『フランス語フランス文学研究』（日本フランス語フランス語フランス文学会）124巻(0)、2024年、pp. 43-57.

渡邊浩司「『クラリスとラリス』におけるゴーヴアン『仏語仏文学研究』（中央大学）56号、2024年2月、pp. 1-41.

YOKOYAMA, Ayumi, « L'examen de la figure de la « Femme Fatale » par Christine de Pizan dans l'Epistre au Dieu d'amours : qui trompe, entre homme et femme ? »『立教大学フランス文学』52号、2023年3月、pp. 3-18.

<翻訳>

フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）「〈トリスタンの跳躍〉（ベルール作『トリスタン物語』第 954 行一起源説明伝説から太陽神話へ）」『中央評論』（中央大学）75巻4号（通巻第326号）2024年1月、pp.142-155.

フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）「隠れし女神—日本の神話学者の中で最もフランス的な人を偲ぶ」篠田知和基・丸山顕誠編『神話研究の最先端 第2集』（笠間書院）2024年9月、pp.14-31.

フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司訳）「鉢かづき—日本のシンデレラ」渡邊浩司（編著）『幻想的存在の東西—古代から現代まで』（中央大学出版部）2024年、pp. 173-199.

ニコラ・シュナデル（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）「サンタクロースの神話的素描」『中央評論』

(中央大学) 75 卷 3 号 (通卷第 325 号) 2023 年 10 月、pp.168-175.

ミシェル・スキルニック (渡邊浩司・渡邊裕美子訳) 「『アーサー王の死』におけるゴーヴアンとクウの影」 「『ペルスフォレ』—フランス語による中世末期のアーサー王物語」 『中央評論』 (中央大学) 76 卷 2 号 (通卷第 328 号) 2024 年 7 月、pp.90-102.

コリンヌ・ピエールヴィル (渡邊浩司・渡邊裕美子訳) 「『剣の騎士』における<逆らうこと>」 『日本カムリ研究』 (日本カムリ学会) 16 卷、2024 年 7 月、pp. 2-21.

クリスティーヌ・フェルランパン=アシェ (渡邊浩司・渡邊裕美子訳) 「『ペルスフォレ』—フランス語による中世末期のアーサー王物語」 『中央評論』 (中央大学) 76 卷 1 号 (通卷第 327 号) 2024 年 4 月、pp.83-93.

#### <書評>

Laurence Doucet 「書評 : WATANABE, Kôji (dir.), *Si est tens a fester* (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Editions, 2022」 IRIS [Online], 43 (2023).

<https://publicationsprairial.fr/iris/index.php?id=3533>

山内淳 「書評 : 『幻想的存在の東西 古代から現代まで』 渡邊浩司編著、中央大学出版部、2024 年」 『週刊読書人』 第 3536 号 (2024 年 4 月 19 日) p.3.

Bernard Robreau 「書評 : WATANABE, Kôji (dir.), *Si est tens a fester* (Hommage à Philippe Walter), Tokyo : CEMT Éditions, 2022」 *Mythologie Française*, 289, décembre 2022, pp. 12-13.

渡邊浩司 「書評 : ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ (小栗友一監修・訳) 『ヴィレハルムティトウレル 叙情詩』鳥影社、2024 年」 『週刊読書人』 3540 号、2024 年 5 月 24 日、p.3.

渡邊浩司 「書評 : 『聖杯—中世ヨーロッパの產物』 フィリップ・ヴァルテール著」 『中央評論』 (中央大学) 76 卷 2 号 (通卷第 328 号) 2024 年 7 月、pp.143-148.

#### <その他>

##### \*コラム

フランス語教育歴史文法派(有田豊・ヴェスィエール、ジョルジュ・片山幹生・高名康文)三省堂総合ホームページ「歴史で謎解き!フランス語文法」  
<<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/cat/言語/歴史で謎解き!フランス語文法>>

「ことばのコラム」 (三省堂辞書ウェブ編集部) 41-46, 2023. 5-6; 8; 10; 12, 2024.2 (現在も連載中)

#### 中世ラテン文学・イタリア文学・その他

##### <研究 (単行本)>

岩波敦子 『変革する 12 世紀』 (知泉書館) 2024 年 10 月、488p.

大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志 (編集) 『修道制と中世書物 : メディアの比較宗教史に向け』 (八坂書房) 2024 年 3 月、416p.

小田部 崑久・宮下規久朗 『西洋の美学・美術史』 (放送大学教育振興会) 2024 年 3 月、300p.

勝又悦子 (編集) 『〈巨人〉の場 (トポス) : 古代オリエント・ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人表象の変遷 : conference proceedings』 (同志社大学一神教学際研究センター) 2023 年 3 月、190p.

桑原夏子 『聖母の晩年 : 中世・ルネサンス期イタリアにおける図像の系譜』 (名古屋大学出版会) 2023 年 12 月、904p.

白川太郎 『13-14 世紀転換期イタリア半島における預言者の研究』 博士論文 (早稲田大学) 2024 年 2 月、706p.

##### <研究書の翻訳>

クラウス・リーゼンフーバー (村井則夫編訳) 『中世哲学の射程: ラテン教父からフィチーノまで』 (平凡社) 2024 年 3 月、704p.

##### <翻訳>

コスマス (浦井康男訳) 『コスマス年代記 : プラハ教会・聖堂参事会長によるチェコ人たちの年代記』 (成文社) 2023 年 8 月、288p.

ジョヴァンニ・ボッカッチョ (日向太郎訳) 『名婦伝 : ラテン語原文付』 (知泉書館) 2024 年 2 月、746p.

(三浦清美訳) 『中世ロシアの聖者伝 (一) : モスクワ勃興期編』 (松籟社) 2023 年 1 月、472p.

(三浦清美訳) 『中世ロシアの聖者伝 (二) : モスクワ確立期編』 (松籟社) 2023 年 12 月、532p.

編集・発行

**国際アーサー王学会日本支部事務局**

〒603-8577

京都市北区等持院北町56-1 立命館大学衣笠キャンパス

文学部事務室 岡本広毅

Email: office@arthuriana.jp

メーリングリスト: members@ml.arthuriana.jp

学会ウェブサイト: <http://www.arthuriana.jp/index.php>